

り情報が歪められる EEG に対し、MEG はそのような影響をほとんど無視できるため、電流源の局在推定(電流双極子モデル)を行うのに極めて適している。得られた情報を MRI 画像と統合することで、機能的情報を解剖的情報の上に可視化できることも特徴の一つである。当初は単チャンネルで測定されていた MEG も、近年ヘルメット型の多チャンネル脳磁計が登場し、加速度的に臨床へと応用されるようになった。

一般的な電気生理的検査と同様に、MEG も脳の自発活動の測定と、加算平均することで目的信号を抽出する誘発活動の測定に分けられる。前者は主にてんかん患者における発作棘波の焦点推定を目的に使われる。後者は、体性感覚・聴覚・視覚機能や、言語・認知などの高次機能といった生理学的研究に広く用いられているが、臨床の場では Eloquent area における脳神経外科手術前の脳機能マッピングに有用である。本検査結果の精度に関しては、脳神経外科手術中の大脳皮質刺激の結果を通して確認されて来ている。

当院では4月から既に30人以上の難治性てんかん患者に対し測定を行っており、今後は頭蓋内脳波記録、術後成績を通して本検査の精度と有用性を検討して行く予定である。一方で脳外科手術における機能マッピングに関しても何例か経験し、今後も発展させてゆきたいと考えている。

7) 髄液鼻漏をくり返し、temporal base meningocele と考えられた1例

関原 芳夫・外山 孚(長岡赤十字病院)
玉谷 真一・吉村 淳一(脳神経外科)
江村 巖 (同 病理部)

【症例】S.W. 33歳、女性【現病歴】1973年(9歳時)頭蓋骨腫瘍の診断で開頭術、脳圧亢進に対して右V-Pshuntを施行された。1985年から1999年までに髄膜炎を4回繰り返していた。1992年より右髄液鼻漏が出現、1999年までに4回出現、1997年及び1998年に当科に入院し精査したが、髄液鼻漏は早期に自然停止したため、修復術は行わず、shuntの状態経過観察されていた。2000年3月、再び右髄液鼻漏が出現したため、修復術を行う目的で入院。CT、MRI、RI cisternography、3DCT、CT cisternography等の所見より、右temporal baseの大きな骨欠損を伴うmeningoceleが蝶形骨洞に進展し髄液鼻漏を生じたと考え、zygomatic approachにて、硬膜内外から観察し、脂肪、

大腿筋膜を使用し蝶形骨洞への交通する部分を閉鎖した。術後、CT cisternography 上髄液漏の所見は消失した。また、術中採取したmeningoceleを形成する被膜に末梢神経組織が認められたこと、術後右顔面(三叉神経第2枝領域)の知覚障害を生じたことより、meningoceleが三叉神経第2枝の正円孔付近を内側に拡大しながら蝶形骨洞に進展し、髄液漏を生じたのではないかと考えられた。【結語】髄膜炎、髄液鼻漏を繰り返した比較的新なtemporal base meningoceleと考えられた症例を報告した。

8) 視野障害を呈した蝶形骨洞原発アスペルギルス症の1例

森 修一・長谷川 仁(水戸済生会総合病院)
鈴木 健司・早野 信也(脳神経外科)

副鼻腔真菌症の多くは上顎洞に原発し、蝶形骨洞に原発することは稀である。視野障害を呈した蝶形骨洞原発アスペルギルス症の一治療例を経験したので報告する。

症例は71歳女性、平成10年8月脳梗塞(左片麻痺)、平成11年9月直腸癌で手術治療の既往歴がある。平成11年12月中旬頃から転びやすくなり、右眼の視力障害を自覚するようになった。平成12年1月当科を受診。右眼耳側の視野障害と軽度左上下肢麻痺を認めた。MRIでは蝶形骨洞内からトルコ鞍内にT1 image, T2 imageでもhomogenousにhigh intensityを示し、Gd造影でやや造影される腫瘍がありpituitary glandを下方から上方へ圧迫していた。また腫瘍内部にはT1 imageでhigh intensity, T2 imageでlow intensityを示す不整形な塊があり、これは浮遊しているようにもみえた。内分泌学的検査では、下垂体機能障害はなかった。耳鼻科的検査で副鼻腔には蝶形骨洞を除き炎症性的変化は全くなく、また血液生化学検査では白血球増多はなくCRPも陰性であった。以上の所見から蝶形骨洞粘液嚢腫と診断した。4月18日耳鼻科と共同で経鼻的嚢腫摘出を行った。術中所見では、蝶形骨洞前壁には一部欠損があり厚い被膜がみられた。この被膜を破ると乳白色の粘稠な内容物と固い黒色調の塊が流出してきた。被膜を吸引除去し十分に洗浄した。内容物の培養は陰性であったが、黒色調の塊は組織学的にFungus ballでありアスペルギルスであった。術後抗真菌剤amphotericin Bの点滴静中を行い、以後itraconazoleを内服中である。現在までのところ経過は良好である。

近年化学療法や免疫抑制剤などの多用により、副鼻腔